
最果ての地で～二人の幕間劇～

蒼衣翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最果ての地で～二人の幕間劇～

【Nコード】

N3584X

【作者名】

蒼衣翼

【あらすじ】

日本から転生したらしき姫と、我が道を行く守護者の、主に会話で綴られる物語。

一夜目・足元に気を付けて走りだせ（前書き）

毎日更新に憧れて、軽く書けるものと思って始めたお話です。でも、毎日更新出来るかどうかは怪しい限り。

一夜目・足元に気を付けて走りだせ

最期のその時に思ったのは、後悔だった。

元々引つ込み思案だった私は他人との付き合いが苦手で、子供時代にそれが元でイジメに遭い。更に人付き合いが苦手になった。だけど、別に私は人嫌いじゃなかった。

人の輪に加わりたかったのにその勇気が持てなかっただけ。

ほんの一步、ほんの一言を躊躇って、先へ進めず躓いた。

勇気が無かったのだ。と、

そう思う事さえ、自分を守る為の言い訳だった気がする。

自分を変えようと決意して、今度こそと友達を作る事を誓い。高校入学を間近に控えたある日の深夜。

私はインフルエンザをこじらせて、あっさりと未来を失った。

「という夢を見たのよ」

「そうか、いかにもお前らしい独創的な夢だな」

「それはどういう意味かしら？」

「ん？誤解されるような難しい事を言ったか？俺は」

「……まあいいわ、折を見てこのムカつきの礼はさせてもらうつから」

「ああ、是非とも退屈な日常を吹き飛ばしてくれよ」

「その性格で“天上の光の君”とか、笑わせるわね」

「いいか、世間は誤解と錯覚で構成されている。そこを更にちょっとつけば誤解は肥大化の一途を辿る」

「肥大化させるな！というか、アンタそのギャップをどうするつもりなのよ！」

「落差というものは人を錯覚させるものだ」

「もうアンタの話は良いわよ、人生に絶望しそうになるから。私の言いたいのは、この夢の記憶のせいであんたなんかとうっかり友達になっちゃって後悔してるって事なのよ」

「なんだ？最近の話じゃなかったのか？随分大人びた夢を見たものだ。あの頃君は確か5歳かそこらじゃなかったかな？」

「……3歳よ」

「ほう、そうすると君はかつて無い天才かもしれないぞ！3歳でそんな夢を見る人間は他にいないだろう」

「だからただの夢じゃなくて、昔の記憶じゃないかと思うの」

「……。」

「ちょっと！その手は何よ。熱は無いわよ」

「いいか、3歳児の昔というと果てしなく幼児だ」

「だから、生まれる前よ！」

「そんな人としてダメっぱい記憶が天上での記憶だっていうのか？」

「人としてダメで悪かったわね！アンタになんかどうせ分らないわよ！それに天上の記憶なんかじゃありません。地球って星の日本という国での記憶です」

「なんだって？樽詰^{チキウ}めと胴長草^{ニラ}がどうした？」

「地球の日本よ！何かその組み合わせ、沼にハマった時の事を思い出すから嫌」

「あの時は酷かったな、沼の底のヘドロ塗れで、辺境に出るという深泥鬼もかくやという……」

「死ね！今すぐ死ね！！お前なんか見張り台から落としてやるから！」

「あそこは物見櫓^{ウツ}って言うんだよ、城主の娘がそんな事では下の者が付いて来ないぞ」

「うつさい、馬鹿！あんたなんか、あんたなんか！どうしても友達が欲しいとか馬鹿な事思っ^テてなければ！あの時笑いかけてたりしなかったのに！！」

「いいかい、人生は誤解と錯覚で……」

「さっき似たような事聞いたわよ！どんだけ世間をごまかして生きてるのよ、このオタンコナス！」

人の生きる光源の地と魔物の生きる影の大地を隔てる深淵の森。
その縁を守る東の王国の城塞都市を治める城主には息子が一人、
娘が三人いた。

末の娘は癒しの姫と呼ばれ、優しい微笑みと妙なる声を持ち、常にその半身とも言うべき天上の光の君、奇跡の御手と讃えられる守り手と在りしと、後の世まで伝えられる。

世界は常に侵食の危機に晒されていたが、何時の世も彼らのような英雄がそれを阻んで来たのである。と、後世に書かれた本の末尾にはそう綴られていた。

二夜目・息を潜め、影のようにあれ

雲低く大気の凍てつき始めたある日、東の城塞都市に預言者が訪れた。

彼はやがて押し寄せる災禍を語り、冷夜を暖炉の火の力でやり過ごしながら陽光の時期を待つ事となる。

全くもってイライラする。

あの自称予言者とかいう不審人物と来たら、細かい事に一々目くじらを立てて愚痴愚痴煩いつたらないし。

そりゃあ、家族の中じゃあたしが一番時間が空いてるけどさ、なんであんなのに付きあわなきゃならないのよ？

大体預言者って何よ、ノストラダムスかってえの！

やっと預言者とか言う癩癪持ちのじじいから開放されて、疲れた体を引き摺りながらお気に入り庭の四阿に向かって歩いてみると、

目の前の大気が音を立てて裂けるのを感じた。
慌てて振り向くと、そこに奴がいた。

「何やってるのよ?」

「何って、今年最後のラクルの実を割ったところだ」

「あんたは果物割るのに真空斬りを使うんかい!危うくあたしの鼻まで削げる所だったでしょう!」

「俺がそんなヘマをやると思うのか?っと、ほれ」

「ちょ、投げるな、……んっ、ウマイ……けどさ」

「もうすぐ新鮮な果物は食えなくなるからな」

「あ、違う、そうじゃない!あんた!どこ雲隠れしてたのよ、おかげであたし一人である偏屈預言者の相手する羽目になったじゃないの」

「騎士団の訓練だ」

「あんたあたしの護衛士に任官してるから騎士団の訓練参加は義務じゃないでしょ、あからさまに逃げたんじゃないの!あんたが信奉者に囲まれてちゃはやされてる間に、あたしがどんな目に遭ったと思う?」

「そうだな、さぞかしネチネチと絡まれたんだろうな、想像がつく」

「なに？あんたあの預言者と知り合い？」

「そんなはずないだろ」

「ならなんでそんな事が分かるのよ？」

「予言というのは膨大な情報を得る手段を持ち、それを分析する繊細さを兼ね、そこから導き出される答えを選択する断固とした頑迷さが必要なんだ。そんな物を生業にしている人間がどんなやつだか容易に想像はつくさ」

「え？予言って“能力”じゃないの？」

「“能力”は情報取得がそうだ。予言はそれを利用した技術に過ぎない。お前、ちゃんと勉強してないだろ」

「そんな細かい事習わなかったわよ。そもそも“能力”は個々に全部違うんでしょ？そんなの調べ切れる訳ないじゃない」

「それは枝葉を見るからだ、その木の幹を見れば真の性質は知れる」

「意味が分からないわ、ううん、そんな話してたんじゃないでしょう？なんであたしだけ人身御供にしてんのよ！あんたはあたしの護衛士なんじゃないの？」

「危険なんか欠片も無かっただろ？」

「精神的な危機だったわよ！」

「大丈夫、君の精神は頑丈だ」

「っ！」

「繊細な女はいきなり男を蹴ったりしないものだぞ」

「軽く交わしておいてよく言っわね」

「予言は確かに有用な情報だが、俺に言わせればあれは単なるさぼりの手段だな」

「さぼりって何よ」

「自分で考える事をさぼるって事さ。予言に従うというのはそういう事だろ」

「兄様はそんな事したりしないわ」

「……なんだって？」

「だから兄様はそんな、考えるのを止めたりしないって」

「おい、あの腐れ預言者は、お忙しい次代様のお耳を汚したのか？」

「……あんたのその態度の違いっぷりに引くわ」

「答えるよ」

「そうよ、お忙しい兄様にねじ込んで対面を叶えて頂いただけでは飽きたらず、時間を浪費してペラペラとしゃべりまくったわよ」

「呪われるべきだな」

「それに関しては同感ね」

「ところでこの本だが」

「あ！それ持ち出し禁止の本でしょ、粹取りが赤いもの。ちょっと何持ち出してるのよ！」

「やかましい女だな。持ち出して無いだろ、ここはまだ城の敷地内だ」

「どこの屁理屈よ」

「これは呪術大全と言ってだな、古今東西のあらゆる呪いが記載されている物だ」

「あんた、それを何に使おうと思って読んでたのよ？怖いわ！」

「俺はこれを是非試してみたい」

「！」

「で、どうする？」

「……あたし、実は凄く試したい薬があっただけど、あんまりにも苦いんで誰も飲んでくれなかったんだよね。ひと舐めしただけで喉を掻き箸りながらのた打ち回られてさ」

「知識を求めるのは大事な事だな」

「そうね、なぜかしら、今日はなんだかあんと話が合うわ」

後に預言者は語った。

果ての地は稀有なる土地。偉大なる男達と心優しき女達の住まう地であった。と。

しかし、かの預言者はその生涯において二度とその稀有なる土地へ赴く事は無かったと言う。

三夜目・囁きは胸に落ちる

産まれる前の話を昔と言って良いのか分からないけれど、昔私は失敗をした。

それは最初、おそらく好意から始まったのだと思う。

友達を作れずに一人ぼつねんとしていた私に、女の子のグループのリーダーらしき子が話し掛けて来たのだ。

今となつてはその言葉の詳細は忘れてしまったけれど、何か簡単な問い掛けだったのだと思う。

でも、私は彼女に言葉を返せなかった。緊張のあまり固まってしまったからだ。

それを彼女は拒絶だと受け取った。

そのすれ違いは、集団での無視を経て、物理的な嫌がらせに発展した。

もし、あの時私がちゃんと返事をしていたら、彼女の好意は暖かく昇華されて、誰も不幸にならなかったはず。

その後悔が今の私を形作る。

逃れようのない戒めのように、私の心を縛っているのだ。

辺境の騎士団には季節毎の重要な役割がある。

冷夜が終わり花の香が大気を暖め始めると、人々は恵みを求めて深淵の森に踏み込む。

それはほんの入口ではあるにせよ、凶暴な獣や、一つ間違えば影の大地の魔物とすら遭遇するかもしれない危険を秘めた場所だ。

騎士団はそれらの危険を減らす為に、季節の変わりに狩りを行う。獣ならば危険はさほどのものはないが、魔物に出会えば死者が出かねない。

いや、魔物が出れば死者を出さずに済む方が奇跡なのだ。それ程に人と魔物の力量は違う。

城主を始めとするこの地を治める血族には、彼らに命ずる義務がある。

“必要ならばその命を捧げよ”と。

「どうしよう」

「あ？初めてのお仕事だろ、せいぜい張り切って命じれば良いんじゃないか？」

「怖い、自分の言葉に責任を持つのが私は怖い」

「はっ、逃げるの？お前が？言ってやれば良いじゃないか、『私の為に死んで来なさい！』ってさ、正に連中の望んでるのはそれだ。相手の望みを叶えてやるのが支配者の勤めだろ？」

「そんなの変よ！」

「変じゃねえよ、分かってないのはお前だ。騎士つてのは死ぬ“理由”を求めてる生き物さ、民の為に死ぬ、敬愛する領主一族の為に死ぬ、その言葉を待っているんだよ」

「武士道みたい」

「^{ブッシ}芋殻がどうしたって？」

「なんでもないわよ！とにかく私はそんな事言ったりしないから、騎士の人たちだって領民には違い無いじゃない」

「はあ？何言ってるんだ？騎士は騎士だ、領民じゃねえよ。連中が聞いたら怒るぞ」

「怒っても良いわよ、とにかくそんな事は言わないからね！ちゃんとみんなが無事に帰って来るように励ますような言葉を贈るんだから」

「そうか、まあ頑張って内容を考えてよ」

「え？ちよつと、あんたもなんか考えてよ」

「だから『私の為に……』」

「違うわ！ばけえ！」

「あゝ、言いたかないが、そろそろ時間だぞ」

「えっ！？あああああ！！！！どうするのよ！！」

「自由に、姫さま」

「馬鹿！死ね！この腹の中まっくろくろすけ！！」

「俺には死ねとか平気で言うくせに」

「あんたは殺したって死なないでしょう！」

「うつ、……くっ、苦しい……」

「ちょっと、笑いすぎよ、何痙攣してんのよ！」

「駄目だ、笑い死ぬ、息が出来ん」

「良いわ、今ここで引導を渡してあげるから」

「だって、おまっ『私の為に生きなさい！』って、ひい、死ぬ……
苦しい」

「仕方ないでしょ、露台から下を見たらみんなが私を期待の籠った
目で見てるし、緊張して何も思い浮かばなかったんだから！あんた
のあれだけ頭に浮かんだけど、あれを言う訳にはいかないじゃない
！だからちよつと変えて……」

「そもそも威厳も何もない、どつかの子犬か子猫みたいな雰囲気の
お前があんな事言うもんだから、もう凄い違和感が」

「そ、それなら笑ってすませてくれれば良かったのに、みんなも」

「あゝ、あいつらもまさか感極まって泣き出すとは思わなかったな、
あれには俺も驚いた」

「騎士の人たちって純粹なのよね、あんな風になって今更訂正も出
来ないし」

「単純で扱い易いよな、連中」

「ちよつと、何爽やかな笑顔で黒い事言ってるのよ！怖いからやめ
てって言ってるでしょ！」

「うんうん、癒しの姫君は言う事が違うね」

「ぎゃああああ！ダメ！そんな呼び名は忘れて！」

「『我ら癒しの姫君の御心に守られしゆえ、魔物などに遅れなど取

りはしません!』とか隊長も健気だね」

「やめろって言ってるのが分からんのか!ボケナスが!」

「癒しだつて、ぷっ」

「あんただって天上の光の君とか言われてるじゃないの」

「強くて美しいって意味だろ?人は見掛けに惑わされる生き物だから仕方ないよ」

「ぐうぐう!苛つく!そのムダにキラキラしてる髪を全部引っこ抜きたい!」

「おお、癒しの姫君よ、そのような乱暴なお言葉を……」

「うつさい!黙れ!そもそもあんたがあんな事言うから!あああ!もう、どうしよう!」

時に人は一つの言葉に心動かす事がある。

最果ての地、魔物の地にほど近い、常に死の隣に位置するその場所で、人の心を支え続けたのは、真に強き言葉の支えがあったからだろう。

守護者は常に彼らの元にあった。それを証明するかのように、長

い歴史の中、その一族は一度としてその地より退いた事は無い。

四夜目・荒野に歌を響かせる

世界には精霊と呼ばれる力が廻っている。

地球世界で私がなんとなく知っていたそれは、幽霊とか神様とかに近い感じの物だったと思うけど、この世界のそれは純粹に力だ。

多くの生物はこの精霊を取り込み、体内で変換して放出する事で様々な奇跡のような技を行う。

だけど、なぜか私にはこの精霊を取り込むという行為が全く出来ず、奇跡の技を持つ事は叶わなかった。

別に全ての人がこの技を持つという訳ではないけれど、戦いに赴くには無ければ話にならない力だ。

なぜなら魔物は全てこの“技”を使えるからだ。

影の大地は激動の地であり、彼らは生き延びる為にそんな能力を身に付けたのだ。

「ちょっと!」

「なんだ?」

「あのさ、……ええっと」

「どうした、何か悪いものでも食ったか?」

「あたしさ、あの、騎士団の、守護乙女になっちゃったじゃない？」

「ああ、満場一致だったな。人気があって何よりだ」

「うつつ……、そ、その事なんだけど、その、守護乙女って騎士団と行動を共にするじゃない？」

「いや、それは違うぞ」

「え？だって伝承の本に」

「それは伝説的乙女の事だろ？守護乙女ってのはいうなれば騎士にとつてのお守りなんだ。出立の時にっこり笑って送り出してやるのが本来の仕事だ。なんだ、お館様からお聞きしなかったのか？」

「そうなんだ、でもさ、伝承にあるって事は、本当は付いていった方が良いつて事よね？」

「あ？お前、騎士団に付いて行く気なのか？馬鹿か？足手まといい外の何ものでもないだろうが」

「そこよ！」

「どこだ？」

「ちょ、何後ろ振り向いてるのよ、わざとらしい！違っわよ、その、足手まといいって事よ」

「仕方ないだろ、技を持たない人間は戦いにおいて邪魔以外の何も

「でもないのは事実だ」

「あんた、グサグサ来るわね。どうせあたしはうちの一族の落ちこぼれよ、……って、何珍しい物見るように眺めてるのよ？」

「いや、へこんでいるお前を見れる事はめったに無いから忘れないように目に焼き付けよう」と

「じゃかあしいわ！こんのポケ男が！」

「また分からない言葉を」

「あんたと話していると核心がどんどんズレていくのよ、そうじゃなくて、技が使えない人間って本当に無力なの？それを聞きたいの」

「そりゃあな、相手はドカドカ技を放ってくるんだ。最低でも守護結界を自分で張れなければ、他人がお前まで纏めて守らなきゃならなくなる。それだけで戦力はガタ落ちだ」

「あのさ、精霊球ってあるじゃない？」

「ああ、物に精霊の力を込めた道具だな」

「あれを使えば自分の力は使えなくてもいけるんじゃないかな？」

「馬鹿を言え、あれは消耗品だぞ？使えば無くなる物だ。何か？無くなる度に取りに戻るとかか？」

「リサイクルって言ってさ」

「ああ？肥料水？^{リサイクル}畑でも作る気か？」

「違うつて！リサイクルっていう言葉があるのよ、私が昔生きていた世界に」

「ああ、また産まれる前の話か、……はいはい」

「ハイハイ言うな！リサイクルつてのは一度使った物をもう一度再生して使うって意味なの。あの精霊球つてさ、要するに精霊の力を物に込めただけなんでしょ？また詰め直して使う訳にはいかないの？」

「いいか、技を使うには意思が必要なんだ。だが物には意思が無い。だから割ったりぶついたりして力を開放して使用するしかない。そうすれば当然物は壊れる。もう一度使うにはそれを技持ちのやつに直してもらえないが、そうするとまた無駄に力を使う事になる」

「うう、……だってあんたはほぼ無尽蔵に精霊の力を使えるじゃない、それなら物を再生したりするのも大丈夫じゃないの？」

「俺には再生の技は使えない。相性が悪いんだ」

「あゝ、いかにもって感じよね」

「……跳ねろ」

「ぐえっ！……ちょ、何するの、服が泥だらけになったじゃない」

「ここの土は良い土だからな、ちゃんと戻しておくんだぞ」

「土の心配か！そもそもはあんたがいらんことしなきゃ良かったんじゃない」

「とにかく諦めろ、騎士達も迷惑だ」

「でも、何か方法があるんじゃないの？義務があるのにそれを成さないなんて辺境領主の血族のやる事じゃないでしょ」

「ん？そうだ、一つ良い方法が無くもないぞ」

「え？ナニナニ？」

「要するにだ、道具に意思があれば問題は解決するんだ」

「そうね、確かに」

「お前だ」

「へ？」

「お前だよ、空っぽの意思ある道具。自分で集められないなら俺が詰め込めば良いんじゃないかと、今思い付いた」

「ほう、今ですか？このこびり付いた泥を眺めていたのは関係するのかな？」

「俺が詰め込むからお前は照準を合わせて撃ち出せば良い。そうすれば火力が増える。騎士団のお荷物にならなくて済むぞ」

「確かに、……確かにそれは良い案かもしれないけど、何故かしら、

私、人として扱われて無い気がするんだけど」

「そうと決まれば、照準合わせと撃ち出し感覚の訓練をするか。これで正面斉射攻撃が面で展開出来るぞ」

「ね、あたし、もしかして武器扱い？便利な武器って感じなの？」

「騎士団と一緒に戦いたいって言ったのはお前だろ、俺じゃないぞ」

「うん、そうだけど。でもちよつと、最初思い描いてたのとかなり違う感じになりそうで、今更後悔しそうな感じが……詰め込むって、詰め込むって、大砲かなんかなの？あたし」

乾きの季節。

それは飢えの季節でもある。

理性を無くした魔物が、人間の集落を目指して怒涛のように襲い来るという被害が少なからず起きる。

その為、騎士団はこの季節、領域の集落を回り、連戦する。

騎士団は、それぞれその象徴たる主（城主）と乙女を持つものだが、彼らは単に騎士団の象徴であり、自身は本拠にて祈りを捧げるのが主な仕事だ。

しかし、歴代数人の守護の乙女は騎士団と共に戦いに参加した。乙女が参加した遠征は必ず勝利するというジンクスもあり、騎士団の士気も上がる為、勇敢なる技持ちの乙女はこの過酷な責務をむ

しろ誇りとする傾向があった。

しかし、この時代。初めて技を持たない乙女が騎士団の戦いに同行した。

そう、かの有名な“癒しの姫”である。

彼女は、常に部隊の先頭に立ち、魔物の勢いを削ぐ露払いをしたという。

技が使えないはずの彼女がどうやって戦っていたのかは定かでは無いが、一説には光の精霊の加護であろうと言われている。

五夜目・眼差しを上げよ、そこに答えはある

昼なお暗い森の中に三条の光が走る。

光はしばし留まって、闇を駆ける獣を照らし出した。

その影が消えぬ内に、今度は白銀の炎が二つ浮かび、互いを追いつながら獣へと挑みかかる。

陽光注ぐ外の光よりも眩い光が瞬時に広がり、全ての者が動きを止めた。

いや、光を呑む影を纏って、地をかすめ飛ぶように走る幾人かの者達は、身動きを忘れた獲物に殺到して行く。

成果を上げても歓声一つ上げず、その集団は密やかに流れるように作業を進めた。

彼らが奪った縄張りを誇示するかのように地面に線を描き、獲物を解体し、得物を手入れする。

先程とは違う、温もりを放つ赤い炎が、供物として捧げられた丸い燃料を呑んで広がり、人間達の空間を照らし出した。

「凄い匂いね、運動部の、特に柔道部や剣道部なんかの防具や稽古着が酷いって聞いてたけど、こんな感じなのかな？」

「またお前は分かん事をブツブツと、精神を病んだ乙女を掲げる騎士団の身にもなってみろ」

「病んでません！……ちょっと匂いには病みそうだけど、うつつ」

「愚痴愚痴言うなら城まで飛ばすぞ？」

「ちょ、やめてよ、正直な感想を言っただけでしょ、それにあんた以外に言うつもりもないわよ。あたしだって自分の立場ぐらいわきまえてるわ」

「大丈夫だ、匂いなど今に全身に染み付いて逆に気にならなくなる」

「あうつ、やめて！毎日お風呂に入りたいと言わないけど、自分が異臭を放つてると考えると悲しくなってるんだから」

「そんな事より、あれはどういうつもりだ？」

「あれ？」

「炎舞の事だ」

「ああ、青白い火の事ね、あれって実際威力としてはどうなの？びつくりさせるだけなの？」

「お前また目を瞑ってただろ」

「あゝ、うん、だって魔物を直視すると怖くって体が硬直しちゃうから、それなら目を瞑ってしまった方が良いかな？」と

「馬鹿か、攻撃の時に目を閉じるとか聞いた事もないぞ、そこらの子供でもお前よりまともだ」

「うつ、だって、あの攻撃、あんたの撃った弾を追尾するんでしょ？別に目を閉じていたって」

「だからお前は馬鹿だというんだ、さんざんやった訓練は何のためだ？言ったよな、技の放出には意思が必要だと」

「えっ、どういう事？」

「そもそも一塊になって飛ばすなら2個でも1個でも変わりは無い。互いに違う方向、違うタイミングで動いて最後に火力を集中させる。その事に意味があるんだ。あれに追尾が付いているのはその最後の火力の集中の為であって、仲良く並んで飛ばす為じゃないんだよ」

「くう、く、悔しい、あんたに何も反論出来ないなんて、なんという不覚」

「ふ、未熟者が」

「お、おのれ、覚えてろよ」

「口だけならなんとでもぼざけるよな」

「う、何よ？」

「負け属性持ちは惨めだと言ってるんだ。大体、お前は昔を引き摺りすぎているからそんなふうなのさ。昔々といつまでも終わった話をグダグダ引っ張って、考えてもみろ、そんな話を次代様やお館様、お前の家族に聞かれたら、お前にとつて今の家族は仮物で本当の家族はそのチキユウとやらに在るとのでは？と心を痛められるだろうな」

「む、昔の話は、確かに気にしすぎだとあたしも思うけどさ、それとこれとは違うでしょ」

「そうか？本当に？その魅力の無い胸に手を当てて考えてみる？魔物を直視出来ない？怖いから？そんなもの誰もが生まれた時から身に染みて知っている事だ。怖いから目を瞑る？それは逃げているからだろ？今を生きている者なら分かっているはずだ。戦いで目を瞑る者は死ぬ。過去に戻るのではなくただ惨めに死ぬのさ」

「それは違うよ。いくらなんでもあたしはそこまで駄目じゃない。今の家族をないがしろになんかした事もないよ！確かに昔を気にし過ぎてるとは思う。だって、失敗したまま終わったんだもの、気にするでしょ？後悔するじゃない！でもそれは今を見てないって事じゃない、違う！」

「へえ、口でならなんとも言えるよな？本当に？逃げずに戦えるのか？」

「戦えるよ！見てなさい、あんたなんかより上手くあの火の弾を飛ばしてやるんだからね！」

「まあ1個ぐらい子供でも簡単に飛ばせるからな、そんな事を自慢

しても恥ずかしいだけだが」

「はっ！100個でも1000個でも飛ばしてみせるわよ」

「よし、良く言った。うんうん、乱れ飛ぶ炎、縦横無尽に降り注ぐ攻撃。やはり魔技戦はそうでなくてはな」

「……あんだ、そういえば戦闘馬鹿バトルジャンキーだったわね」

「そんな単純な物と一緒にするな、俺がこの世にもたらしたいのは最高の魔技の戦いだ。せつかく生きた魔道具を手に入れた事だし、せいぜい派手に楽しもうじゃないか」

「ちょっと待て！その魔“道具”ってあたしの事か？物扱いか！」

「赤い炎も良いよな、ちょっと威力は落ちるけど、地中から瓦礫と一緒に噴出させるとかすれば威力も稼げるかもしれないな」

「ちょっと、え？もしかしてあんだマジで魔弾を100個とかコントロールしろって言うの？有り得ないでしょ？」

「何言ってるんだ？1000個でも良いと言っただろうが」

「いや、あれは勢いで。ああ、あたしって、どうしてこう、後先考えない性格になっちゃったんだろう。いくら前世で決断出来なくて失敗したからって真逆をやることは無いのに、……ああもう、決めたわ、もう過去は振り向かない。前向きな女になるわよ」

「お？飯が出来たようだぞ」

「ちょっと、話聞きなさいよ」

闇を拓く光。

人々がかの人に見たのは恐らくはそれであつただろう。

彼らは軽々と光を呼び込み、人々を導いた。

詩人は長く後世までも歌う。癒しの姫と天上の光の君の、他に並ぶ者の無きその鮮やかな輝きの軌跡を。

六夜目・光と影は交わる事なく、ただ共に在るのみ

光と影、二つの土地は何が違うのだろうか？

多くの者がそう考え、幾度も調査が行われた。

その結果分かった事は、影の大地では精霊が異常に濃く、我々だと上手くそれを消化出来ずに精霊酔いを起こす程だった事。意外な事に緑が濃く、しかし植物相が全く異なる事。当然のように生物相も全く異なる事。

つまり私達が魔物や魔王一族と呼んでいる存在は、影の大地の一部に過ぎなかったのだという事が判明した。

互いにとって互いの土地は恐らく有害であり、そのせいで接触や飢えによる襲撃はあっても侵攻は起きなかったのである。

また、境界に当たる森の際に住む者に特殊な力を持つ者が多いのも、影の大地の濃厚な精霊の影響を多少なりとも受けているからであろうという事も推測出来た。

それにしても不思議な話ではある。

ただ、森を境にただけなのに、なぜそんなにも二つの場所は違っているのか？いつかはその理由も判明するのだろうが、そのような理論上の問題は、互いにとってそれ程重要ではない。

分かたれた者達が交わる場所では、当然のように争いが起きる。が、あまりにも違う環境ゆえにそれ以上の戦いには発展しない。重要なのはその事実である。

「魔物って、共食いをするのよね？」

「その認識は間違っているな。共食いをするのではない。共食いするのが常態なのだ」

「ええっと、つまり？」

「……馬鹿にでも分かるように言うと、彼らの主食は自分と同じ種族なんだ」

「馬鹿とは何よ、でもそれって、どうやって増えてるの？」

「ほう、馬鹿にしては良い所に気が付いたな、褒めてやる。まだ詳しい事は分かってないが、どうやらある一定以上の共食いを果たすと、その個体が幼体を産むらしい」

「へ？」

「お前、魔物に雌雄の差があるのを見たことあるか？」

「えっと、魔物ってみんな単性種族だって事？もしかして魔王の一族も？」

「俺達が魔王の一族と呼んでいる影の大地の人種族も、我々で言う所の男しか目撃されていない。そもそもそれもいかついから男と判断しただけで、結局男でも女でも無いのだろうか」

「でも見た目は人とそっくりなんでしょう？」

「魔物の中にもこちら側の生物にそっくりな物がいるし、もしかすると元々の根の部分は同じなのかもしれないな」

「それって凄く不思議。そういえば、昔、影の大地に調査に赴いたお父様とお兄さまが魔王の一族に出会った話を何度も強請ってよく聞いたけど、普通に言葉が通じたみたいだね」

「精霊が介在してるせいで意思の疎通に差異は無いからな。認識の差は多少あるだろうが」

「魔物とかが群れを作らないのはそのせいなんだね、まあ個体でこんなに苦労してるんだから、群れなんかで来られた日にはもう到底敵わなかっただろうから良いんだけどね」

「連中が共食いをしなければこんなに苦労はしないのだから、その考え方は意味が無いな」

「え？どういう事？」

「……なあ、まさかとは思うが、俺の受けた教育よりもお前の受けたそれが劣るって事は無いよな？」

「うっ、悪かったわね、ちゃんと勉強が身についてなくて」

「ほう、自覚は一応ある訳か。良いだろう、その哀れな脳みそにも理解出来るように説明してやろう」

「くつ、……憎しみで人が殺せたら……」

「魔物も魔王の一族も、素の能力は俺たちより少し高い程度、といつてもまあ一般的な力の差として数倍はあるんだが、それでもその程度だ。だが、共食いによって、連中は相手の力をそのまま取り込む。つまりもし初期値が3倍だったとしても、共食いの度に6倍、9倍となっていく訳だ」

「ええええつ！？ちよつと待つて、それってやばいじゃない、物凄く沢山食べてる相手に出会ったら私達なんか瞬殺つて事？」

「確かに理屈ではそうなるが、そうは上手く行かないのが生物としての限界だ。連中の持っている精霊器官と俺たちのそれは実は大差無い。お前も魔物の解体は見たから知ってるだろう。家畜とそれ程違わなかったはずだ」

「そう言えば、そうね」

「つまり扱える精霊には限界があるという事だ。学者は、だから彼らは分化のような手段として子供を産むのだろうと言っていた。つまり過剰に摂取した力を放出する手段として子供を産む訳だ」

「それって親子関係はどうなるの？」

「連中に親子関係なんか無いよ」

「え？どういう事？」

「一度でも子連れの魔物を見た事があるか？影の大地の生物は子供を産むだけで育てはしないのさ」

「そんな、どうやって子供は育つのよ」

「……さあ？」

「さあ？つて」

「見た人が居ないから分からない」

「そんな」

「気になるなら調べれば良いじゃないか？何なら影の大地に行ってみるか？案外お前なら平気かもしれないぞ、精霊酔い」

「えっ、あ、そうか、私は精霊取り込みの能力が無いから……何にでも取り柄はあるものね…って、嫌だからね！無理でしょ、普通に！」

「そうか？」

「一人で魔物と戦って勝てる訳ないでしょ！」

「お前のようなカリカリ娘はあっちから逃げ出すかもしれないぞ」

「カリカリ娘って何よ！」

「いつもカリカリ怒ってるから、カリカリ娘」

「いつも怒ってないわよ！あんたにだけよ！」

「それは光栄に思ふべきなのかな？」

「あんたがそうやって、飄々と私をからかうからでしょうが！」

「友達の特権じゃないか」

「うつつ、何で私あの時あんたと友達になろうとしたりしたんだろ
う」

「俺が知る訳がない」

「くつ、そういえばあの時あんた庭の木の下でどんよりしてたんだ
ったわね。なんとなく覚えてるわ」

「俺ははつきり覚えてる。なんだかちっこい生き物がちよこちよこ
寄って来たんで、物珍しくて観察してたからな」

「3歳だったんだからちっこくて当たり前でしょ！」

「顔つきもどこか気の抜けた感じでばやあつとしてたし」

「キリッとした3歳児なんか怖いわ！……くつ、もう良いわ、そん
な事より明日は帰還祭なんだから準備しなくっちゃ」

「全くだ、いらん足止め食らった」

「あたしのせいなの？」

「それ以外の何があるんだ？」

「……庭で寝転がってたじゃない」

「一時休憩してただけだ」

「絶対サボってた。あんたいかにも涼しい顔して中身は不良なんだから。他人は騙せてもあたしは騙せないわよ」

「友達甲斐があるな」

「それって用法違うから、絶対」

「お前もサボってないで行くぞ」

「だからサボってたのはあんたでしょ！全く」

人々の生きる光源の地と魔物の生きる影の大地、この二つの土地が何をもつてしてこのように分化したのかは未だ多くの謎が残る。勢力の拡大を欲する多くの者が森を平らげ、更に影の大地までも進出せんと望んだ事は歴史上何度もあった。

その度に辺境の守護をする11の守族が力を合わせその野望を退けて来た。

「我ら影の大地にて生きるに能わず。多くを欲するは即ち滅びの道」
守護城主の筆頭の、そんな言葉が残されている。

七夜目・遠き道程を歩む者、幸いあれとなんじに言う

生物は欲望によって生きていると言っても決して暴言ではあるまい。

だが、生物の頂点に立つた人類の、複雑で多岐に渡る欲望は必ずしも生きる事に繋がらない場合がある。

その一つの究極の形が戦争だ。

己の持たない物を他者が持っているという事を許容出来ず全てを欲する。あまりにも単純で愚かにも思えるその理由で、人は幾度も争い、殺しあつた。

あまつさえ、いつそこういう争いが起こっても有利に立てるように、その為の準備さえするのだ。

おそらく、ほんの子供ですら、それが間違いだと指摘出来るだろう。

しかし、人が国という集団を作って以来、その間違いは正された事はない。

「ちょ、聞いた？」

「主語の無い話を理解出来る程俺は天才だと思われていたのか？期待を裏切って申し訳ないが……」

「うつさい！長々と嫌味を言つのをやめい！」

「言われるのが嫌なら少しは常識的な言動を試みれば良いものを」

「うつ、いや、そういうのはどうでもいいのよ！騎士団から重傷者が出たって！」

「そりゃあ仕事柄そういう事もあるだろう、連中も覚悟はしているはずだ」

「それが違うのよ！魔物を生け捕りにしようとして無理をしたせいなのよ、手足を失った人が出て」

「それは初耳だな、生け捕りとか無茶な話だが、どついう経緯でそうなったんだ？」

「私も全然聞いてなかったから、お父様を締め上げたら……」

「お前、お館様に何をやってる！正気か？」

「ちょ、苦しい、離せ、この馬鹿！……あんたお父様とお兄様の事になると眼の色が変わるわよね」

「命の恩人だからな」

「意外な義理堅さにびっくりだわ」

「俺は恩も恨みも忘れないぞ」

「恨みは忘れなさい、怖いから」

「とりあえずそれ相応の報いを受けてもらったら忘れても良い」

「極上の微笑みを浮かべながら言うセリフがそれ？震えが走るわ。つてか、あたしに恨みとかないでしょうね？」

「おまえは友達だからイラつときたらその場で返す事にしてる」

「……ね、それって喜ぶ所なの？ちょっとあなたの友達の定義を知りたいんだけど、知ったら怖くなる気がするから聞きたく無いような気もするし、……いや、いいわ、聞かないから。それより、ほら！騎士団が無茶な任務をやらされた話よ！」

「おまえ、話が逸れすぎだろ」

「誰のせいよ？まあ良いわ。ともかくお父様に丁寧をお願いして聞き出したら、どうも中央のお偉いさんが関わってるらしくてさ、こうなったらもう直談判じゃない？あたしはこれでも騎士団の守護者なんだし」

「本当に丁寧をお願いしたのか？さっきおかしい事言っただけか？」

「あんたのツツコミ所はやっぱりそこなのね、ううん、分かったた

けどさ。まあとにかく、そういう事だから私ちょっと中央へ行つて来ようと思つんだ」

「そうか、今から行くのか？」

「すごくあつさりしてて拍子抜けしたんだけど、不安とか無い訳？馬車使つて確か10日以上掛かるとか聞いてるし」

「王城がある都市は壁すらないし、家は泥を固めた見た目重視の物ばかりと聞いている。城ですら強度より見た目で造られてるとの事だ。制圧するにしても破壊するにしてもここよりは楽なんじゃないか？」

「ちょっと！あたしは別に戦争しに行く訳じゃないから、変な事言わないで！てか誰かに聞かれたらどうするの？今のあんたマジだったでしょ？」

「一度あつちの騎士団が手合わせに来た事があつただろ？酷いもんだったぞ、あれなら俺1人でも……」

「だからヤメテ！！ちょっと、マジで考えないで！違うから、直談判つてのは武力行使じゃないから、騎士団引き連れて行く訳でもないし、あたし1人で行くの」

「お偉い連中がおまえのような小娘の話に耳を傾けるとは思えないな」

「だからといって武力行使はダメでしょ？良い事？私たちはこの地で人の地に影が迫るのを防いでいるのよ？守る立場なの、分かってる？」

「何から何を守ってるのか、怪しいところはあるけどな」

「とにかく話し合いに行くんだから、絶対に攻撃はダメだからね」

人の欲望が潰えないのは種族としての盛隆の証ではある。

しかし、それはまた自らに痛みを強いる自傷の道への入り口でもある。

戦場で理性を説く者があざ笑われる事は正しいだろう。

だが、その一方で、戦場に人々を送り出す者に理性が無いのは悲劇である。

大勢に異を唱える者を勇者と云うか愚か者と云うか、それは歴史の中に綴られた物語に任せるしかないのかもしれない。

八夜目・我は求め行動する。たとえ倒れ伏すともそこに道は残るであろう

時々ふと我に返って考えてしまう事がある。

私は誰でどこにいるのだろうか？と。

ビルが立ち並び、車が唸りを上げて行き交うコンクリートの街に住んでいた、高校受験を終えて、やがて来る明日を信じていた女の子？

昏い森を眼下に収める堅牢な黒石造りの砦を中心とした、戦う守り人の街である辺境の城塞都市の城主の末娘で騎士団の守りの乙女？
どっちもまるで夢の世界の登場人物のように、不確かで非現実的だ。

だけど、どれほどの迷いや戸惑いがあるうとも、今ここでやらなければいけない事があるのなら躊躇ってはいけない。

やらなかった後悔はもう十分味わった。
どうせならやって後悔するべきだろう。

「ちょっと!」

「……」

「ねえ、お願いだから起きて!」

「……」

「頼むから床に突っ伏して笑うのはやめて!」

「……うつ、しかし、あまりにも……くっ、おまえ、きっと伝説になるぞ」

「冗談じゃないわ!そんな伝説まっぴらよ、ああもう、どうしてこんな事になっちゃったんだろう」

「おまえが男に馬乗りになったからだろ?……うつ、思い出すと発作がっ」

「そんなに笑いたけりゃ外でやって!蹴りだすわよ!」

「馬車から落ちたら走らなきゃならないじゃないか、面倒くさいから勘弁しろ」

「……普通の人はず怪我の心配をするんだけどね。てか、あんた馬車と並んで走る気なの?恥ずかしいからやめてよね」

「なら蹴りだすとか言わなきゃ良いだろうが」

「だって、こんな密室に二人なのに、1人が床に転がって笑いの発作を起してる状況なんか耐えられないじゃない！少なくとも普通の神経の持ち主なら絶対そうよ」

「おまえが笑える事をするのが悪い」

「ちょっと、そもそもはあんたが城門を壊した所から既に躓いてたのよ」

「俺が壊した？老朽化してて勝手に壊れたんだろう？何しろちゃんと破壊防御の技が掛かってたし、俺ごときの力で壊れる訳が無い」

「あんたが気色ばむ兵士相手に堂々とそう言った時には、どうしてやろうかと思つたわ」

「なぜだ？相手はちゃんと信じたぞ」

「あれは絶対信じてなかったわよ、なんか怖がってたし、それまでの態度をがらつと変えたのは命が惜しかったからよ、老朽化で粉々に壊れる訳ないじゃん」

「あの事故のおかげで、ちゃんと話を聞く気になったのは良かったな。悪しき事にも幸いは潜むってやつだ」

「あくまでも事故にする気ね、あんたは気付いてないでしょうけど、あんたがわざとらしく引用とか諺とか持ち出して来る時は絶対は何かをこまかそうとしてる時なのよ」

「素晴らしい慧眼恐れ入る」

「黙れ！破壊魔！……ううん、それどころかあんた、あのなんとかいう大臣に何したのよ！？」

「何も。そもそも城内には城門よりも強力な防衛陣が張り巡らされていたぞ。俺に何か出来る訳がない」

「大体、何かするにしてもタイミングつてもんがあるでしょうに、なんでうちの悪口を言い出した途端に倒れるのよ？疑ってくださいと言ってるようなもんじゃないの？どういうつもり？前も言ったけど、あたしは喧嘩売りに行った訳じゃないのよ！」

「悪口じゃないぞ、あれは侮辱だ、しかもお館様を名指しで謂れの無い侮辱を口から垂れ流したんだ。きっと精霊神の怒りに触れたんだよ」

「驚いたわ、あんたの口から神様の名前が出るとは思ってもみなかった。食事の時のお祈りだって目を瞑ってるだけで何も考えて無いじゃないの」

「俺の考えが読めるとか、恐るべきは無技の乙女」

「誰でも分かるわ！あんたの口、全く動いて無いんだもの。てか無技ってなによ、無技って！確かに私は技無しですけど」

「褒めたのに」

「どんな褒め言葉だ。いや、またあんたのペースに流される所だったわ。良い事？今後どんなに腹が立っても、人を攻撃しちゃダメだからね？ダメ、絶対！」

「俺は攻撃してないだろ？攻撃といえばおまえがやったじゃないか、大臣に馬乗りになって、……うつ、思い出したらまた発作が……くっ」

「笑いの発作で死んでしまえ！あれは攻撃じゃないわよ、心臓マッサージをしたのよ。急に泡吹いて倒れるんだもん、びっくりして救命措置に走っちゃったのよ」

「心臓^{マッサージ}“投石”？」

「マッサージっていうのは例の昔の世界の言葉よ。ええつとね、心臓が止まった人の心臓を刺激してまた動かしてあげる事……かな」

「心臓？なんか左胸を押してただろ？」

「う、昔の世界じゃ人の心臓は左にあったのよ。うっかり訓練のままやっちゃって」

「えらくバランスの悪い体だったんだな」

「いいから、とにかく蘇生しようとしてただけだから、攻撃じゃないからね」

「おまえが馬乗りになって足の殆どが頭わになってたから、王や大臣連中は喜んでたぞ」

「うえっ！？そんな事になってたの？道理で誰も手伝いもしなければ止めもしいと思ってたのよ、あんたどうして注意してくれなかったの？」

「記録士がスケッチを撮ってたし、せっかくだから後世に残るのも良いだろうと」

「えっ！？……ちょ、馬車停めてえええええ！！何で早く言わないのよおお！！」

「どうどう」

「変ななだめ方するな、ああっ、もうきつと編集部送りになつてるわよね」

「そうだな、外報に載るかもしれんな」

「終わったわ、あたしの人生はもう終焉を迎えました」

「まああれで懲りて当分は無茶は言つて来ないんじゃないか？」

「何をどう懲りるのよ？懲りるのはむしろ私じゃないの？とんでもない恥をかいたんだし。そもそももう既にお父様から通達が来てたつて言うんだから恥の上塗りよね」

「さすがはお館様だ、先を読んでいらつしゃる」

「どうせあたしは今しか見えていません。バカで愚か者で恥ずかしい娘ですよ」

「なんだ？いつもの過剰な元気はどうした？落ち込んでいる姿がおまえほど似合わない奴もいないだろうに」

「あたしだって落ち込む事だってあるわよ。昔は毎日のように落ち

込んでたし、むしろ暗いのがデフォだったわ」

「また昔の話か、謎言葉を発するのはいい加減にした方がよいぞ」

「何よ、どうせ私はやる事成す事全然駄目なのよ、今度は後悔しないように頑張ろうって思ってたのに、何もかも空回りばかり」

「そうか？」

「そうなんですよ、何よ、笑い転げてたくせに」

「ちょっと外の空気でも吸って、気分を変えてみたらどうだ？」

「なに？どうしたのあんた、気遣いをする姿とか、なんかちょっと怖いんだけど、そうやって爽やかに笑ってる時に碌な事考えてる事なかったし」

「落ち込んだ末に疑い深くなっているんだな、とにかく今見ないと後悔するぞ」

「え？……ちょっとこんなところに魔物とか来てないわよね？ちょ、大丈夫なの？うちの馬は戦闘用とはいえ一頭じゃ辛いでしょ？あんた無茶な技持ちなんだから助けてあげるのよ……って、あ、あれ？」

「良かったな、合流する前に顔を拭く間ぐらいありそうだぞ」

「なんでうちの騎士団がこんなところに来てるのよ！ちょ、もしかして全員？皆みんなの守りはどうなってるの？」

「おまえが心配だったんじゃないか？何しろ騎士団の守護乙女、癒

しの姫だしな」

「そんな、結局あたし何の役にも立てなかったのに」

「そうだな、全く不思議だ。おまえなんかを有り難がって担ぎ上げてるんだからな」

「……っは！そうだ、顔！顔！情けない顔になってない？」

「いつも通り餌を貰えない子犬みたいな顔だ」

「何よ、それ！ああ、やばい！ええっと、確か濡れ手拭があつたわよね」

「化粧も落ちるな」

「っぎゃあああ！どうしよう？」

「安心しろ、行軍時におまえのスッピンなんざみんな見慣れてる」

「あ、ああ、そうか！もうみんなとは臭い仲だもんね」

「面白い言い回しだな。それも昔のチキウとやらの言葉なのか」

人と人との争いに魔物を利用しようとした王がいた。

生け捕りなど出来るはずもない魔物を生け捕れと命を出し、最果ての砦に危機を招いた。

それを憂いた癒しの姫は、護衛士である光の君のみを供に都へと上り、王と諸卿に理を説いた^{ことわり}と言う。

その際、激昂した二人は城を破壊し、大臣を昏倒させたという逸話が残っているが、彼女の伝を伝える者達からは、自らの正当性を主張する為の王侯貴族の捏造であると、ほとんど無視されているエピソードであった。

九夜目・真実は鐘を鳴らし迷い人を誘う。だが人は目を瞑り、手探りでその音の信じられない事、信じたくない事、似たような言葉ではあるがユアンスは全く違う。

前者はその意外さに驚きを覚え、後者は心情を深く決る。時にその二つが同時に発生すると、人はただ、啞然としたまま、遠い現実の中に取り残される事になる。

「あのさ、ちょっと聞きたい事があるんだ」

「なんだ叱られた犬のような顔をして」

「なんで犬なのよ、いや、あたしの事は良いのよ、放っておいて。そんな事より、ちょっと確認したいんだけど」

「なんだ？改まって？」

「あのさ、あんたって……その、……もしかして」

「ああ？グダグダしてないではつきり言え」

「う、分かったわよ。……あんたつてもしかして、魔王の一族？」

「あー、ちょっと待て」

「どしたの？この技展開って何？見慣れない模様」

「ここの様子が外に漏れないようにした。まあ気にするな」

「なんでまたそんな事をわざわざ？城内は技阻害の術が施されているでしょ？見える範囲に居なければここの様子なんて分からないわよ？っていうか、なんでここで技展開出来るのよ！」

「……馬鹿だ馬鹿だと思ってたが、今までお前の目前で何度かここで技を使ってたと思うんだが」

「あつ！そういえば！」

「いや、良いんだ、お前が馬鹿で間抜けな事は骨身に染みている。問題ない」

「くつ、いつもながらむかつく……じゃなくて、ちょっと、ごまかさないうで返事！」

「だから返事する為に聞かれないようにしたんだろうが？ちょっとは頭を使い、お前も」

「う、それで……どうなのよ」

「そうだ、俺はこっちの人間が魔王の一族と呼んでいる種族だ。と
いっても同族が全部親族とかいう感覚は無いけどな」

「やっぱりそうだったんだ」

「で、お前はなんで気付いたんだ？」

「ほら、あたしはあんたの練った精霊をしょっちゅう突っ込まれて
るじゃない？」

「突っ込んでるといつか叩き込んでるといっか」

「やっぱりそんなつもりだったのね。ともかく、それで気付いたの
よ。あたしは精霊を取り込めないけど、精霊器官は守護領主の一族
らしく発達してるでしょ？だから一応精霊を感じる事は出来るの。
あんたの練った精霊は他の人の精霊と全く違うんだもん。他の人が
そよ風としたら、あんたのは鋼の針だわ。あまりにも違いすぎてず
っと不思議に思ってた。それに、元々あんたの見付かった場所が影
の大地だった事とか考えてみるとさ」

「まあそうだな、確かにお前の立場なら気付かない方が不思議なく
らいだ。俺もお前の馬鹿さ加減に油断してたな」

「そ、それで、どうするつもりなの？」

「どうするとは？」

「え？だって、その、魔王の一族って事は、人間と敵対してるって
事よね？」

「いったい誰がそんな話をした？」

「え？え？だって、あれ？……そういえば影の大地の侵食を止めるのがうちの役目って聞いてたけど、別に魔王が攻めてくるとかは聞いた事が無いわね」

「以前話したはずだぞ、影の大地の人間にとって敵は同族だと」

「そういえば、そんな話を……って共食いするって言ってなかった？」

「言っただけ」

「じゃあ、あんたも同族を食べた事あるの？」

「いや、ない。お前も知つての通り、俺がお二人に保護されたのはほんの子供の頃だ。まだ隠れて生きている年頃だ」

「そ、そう、そっか、ん、そっか、じゃあ、今まで通りって事で良いのかな？」

「お前はそれで良いのか？」

「え？だって、人と敵対しないし、同族じゃないあたしたち相手に食欲も刺激されない訳でしょ？……されないよね？そういえばあんたが保護された時に起きたっていう大侵攻って何が目的だったの？乾きの季節には魔物の襲撃があったりするし、……も、もしかしてやっぱり私たちも食べるの？」

「あの時の話をするならかなり長い話になるぞ。それで良いなら俺

の知っている程度の事を話す。……だが、いいか、これから話す事だけは、他の誰にも言うんじゃないぞ。影の大地に生きる全ての生き物、いや、この世界の全ての命の根源に関わる話だ」

「そんなにおおごとなの？ うん、他人に話さない約束は出来るけど、あたしなんか聞いて良いのかな？」

「お前以外の誰かに話すつもりはない。たとえそれがお館様や次代様だとしても、だ。お前があの時差し出した手は、おそらくそれを受け取るだけの理由になると、俺は思っているからだ」

「なんか、よく、分からないな」

「お前の頭に期待はしてない」

「悪かったわね！」

「だが、お前の魂には全てを委ねる価値がある。と、俺は知っている」

「う……」

「どうした？」

「これ、小指出して」

「小指？ 末指の事か？」

「うん。これね、昔、あたしが生きてた場所で友達同士がやる約束の印なの」

「ほう」

「あたしはあんたの秘密を守る事を誓います。ゆびきりげんまん、嘘付いたら針千本のくます！指切った！」

「待て、お前が秘密を破ったら俺が針を千本飲むって事なのか？意味が分からんぞ」

「違うわよ！あたしが飲むの」

「恐ろしい誓いだな」

「単なるおまじないよ、って、なんでそんな目で見るのよ？」

「チキウとは恐ろしい風習がある世界だったんだな。なるほど、苦労したんだな、お前」

「ちょっと！変な事で同情しないで！なんかもの凄い誤解だから。ねえ、何１人で納得してるのよ、聞きなさいったら！」

世界の秘密は影の大地にある。と、多くの先見の技者が言った。
だが、その本質に辿り着いた者は誰もおらず、どれほどの見者でも影の大地を覗く事は叶わなかった。

この世界は精霊の力に満ち、おのおの各々が技を持ち文化を生み出している。

しかし、誰一人として、その精霊の力の本質を知る者はいないのだ。

最終夜・最も暗い夜こそが、夜明けを呼ぶのだと小鳥は歌う。

私は考える。

どうして終わった生を抱えたまま、新たな生を始めてしまったのだろうか？

以前の私の人生は決して幸せでは無かったし、なにより自分に失望していた。

もう一度最初からやり直したい。そう切実に思っていた。

もしかしたらそのせいだったのだろうか？

だとしたら、私は今を望みの通りに生きているのか？

ただ前の生の反省ばかりで、その反対に生きようとだけしていたのではないのだろうか？

いつもいつもずっと迷ってばかり、いつその事など知らないまま生きていれば良かったと思った事も何度もある。

でも、その度に考える。

その記憶が無かったら、私はこの手を差し出しただろうか？あの言葉を発しただろうか？思った事をはっきりと告げようと務めただろうか？

もし、この人生を与えてくれた何ものかがいるのだとしたら、きっと私はお礼を言ってしまうだろう。

それが悔しいと思ってしまう自分に少し笑ってしまうけれど。

「魔物や魔王の一族は子供を育てないと、前に言ったな」

「うん」

「魔物や魔王は最初、そうだな、卵、いや、食べかすの塊として吐き出される」

「え……食べかすって……」

「他に適当な例えが見当たらないからな。要するに吸収出来なかった同属の一部がそいつの腹の中で固まって出来た塊だ。それが一定の大きさになると、ある場所に行ってそれを吐き出す」

「ある場所って？」

「樹だ」

「樹？」

「そうだ、影の大地の中央に巨大な樹がある。あまりにも巨大なのでそれ1本で森のようになっていて特別な樹だ」

「それは、凄いわね。見てみたいな」

「前に言った通り、お前なら見に行けるかもしれないぞ」

「う、……魔王の一族って事は、あんたも当然平気なんだよね？まあ一緒に行って欲しいって言うんなら行ってあげても良いけど」

「なんで俺が主体になってるんだ？まあ良い。行きたいならいつか行くか？」

「う……ん？……あ！嘘嘘！！駄目よ！あっちで他の同族に会ったら食べられちゃうんでしょ！？駄目駄目」

「ほう？俺の心配をしてくれるのか？だが、逆に俺がそいつを食って、強大な魔王になるかもしれないぞ」

「どつちにしろ駄目よ！それとも……やっぱり食べたいもののなの？だって、主食なんでしょ？」

「さあ？俺自身はまだその“餓え”を経験した事は無いからなんとも言えないが、なんとなく美味いらしいという事は分かる。実際他の何を食べても俺は味を感じないからな」

「えっ！？そうだったの？どつりでいつもつまらなさそうにご飯を食べてると思ってた」

「まあ俺にはそれが当たり前だから、別にどうでも良いけどな」

「どうしても良くないわよ！ご飯が美味しくないなんて大変な事じゃない！なんとかならないのかな？魔物の肉とかどうなんだろう？あれって人にはきつすぎて毒だからって全部焼いてるけど、あれならあんたも美味しく食べれるんじゃない？」

「……考えた事も無かったが、魔物の肉なんかどう言い訳して使う気だ？ 良いから気にするな、最初から無い物は欲しいとは思わないものだ」

「良く無いって！ 味覚を感じられないって事では無いんでしょう？
せつかく毎日食事するんだもの、そこに楽しみを見つけられる可能性は探ってしかるべきだわ」

「ほんとに面白いな、お前」

「あ！ そういえば話の続きは？ 影の大地の真ん中にある樹がどうしたの？」

「思考が遠回りした末に元に戻ったのか？ 恐るべき思考回路だ」

「ちょっと、変な感心はしなくて良いから！」

「……樹の根元に産み落とされた“それ”はその樹の根に侵食され、一体となって根のコブのようなものになる。やがてそれからそれぞれの姿をした魔物が生まれる。区別するのが面倒だから、魔王の一族も魔物として話すぞ、基本は一緒だし」

「う、うん」

「その子供はある程度大きくなるまで樹から栄養を貰う。そして、自分で生きていける程に成長すると、自然と樹と繋がっている部分が枯れて1人立ちする訳だ」

「そんな風になってるんだ。不思議な樹だね」

「お前の感想はそれだけか？」

「え？……えっと、じゃあ、あんたにとってその樹ってお母さんみたいな感じなのかな？」

「……まあそうだな。俺だけじゃなく、殆ど何にもこだわりを持たず気ままに生きる魔物が、唯一、生まれながらに強い愛情を感じる相手がその樹だ。そして、それが昔の大侵攻に関係してくる」

「あ、ちゃんと繋がるんだ」

「何の説明だと思ってたんだ」

「なんかいつの間にかあんたの身の上話になってたのかと思って」

「お前じゃあるまいし、そんな脱線をするか」

「むつ、私の方がもつと直接的に話すから、あんたのように分かり難く無いわよ」

「見解の相違だな」

「とにかく、それがどう大侵攻に繋がるの？」

「後から知った事だが、あの時、こちらの人間は新たな村を開拓しようとして森を切り開いていた。おそらくその時に、例の樹の若樹を伐ってしまったんだろう。その母なる樹が怒りの“声”を上げたんだ」

「声？樹が声を出すの？つてか、若樹つてなに？」

「声と言っても俺達が使うような声とは違う、それに音による物なら範囲も狭いだろうが、あれは全ての“子供”に届いた。それを感じた魔物がその村に殺到したんだ。そして若樹だが、文字通り我等の母なる樹の子供だ。といっても母体と違って精霊の力は薄い。基本的にはそこらにある樹と同じだな。ただ、母なる樹とは感覚が繋がっているらしい」

「それが大侵攻の原因……」

「そうだ」

「沢山人が死んだのよね」

「ああ、魔物も随分死んだだろうけどな」

「あんたが見付かったのは、その後原因を調べに影の大地に入り込んだ父様と兄様に、だったわよね。お二人はあのゴタゴタで親を亡くした子供だと思ってあんたを引き取った」

「そうだ、俺は1人立ちしたばかりで、痩せてまだふらふらしてたから、襲われて森に逃げ込んだ子供と思われたんだ」

「どうして？」

「ん？」

「どうしてあんたは父様と兄様にあんなに恩を感じてるの？故郷から知らない土地に連れてこられた訳でしょう？」

「あの場所は真正銘の弱肉強食の世界だ。子供の殆どは、ただ餌になる為にいるようなものだ。よほど運が良い個体以外は、ただ強力な同族に食われるだけの運命が待っている。お二人はその俺に違う道を示してくださったんだ。真正銘俺にとって命の恩人だ」

「そうなんだ、そうか、じゃあ、ここに来て良かった？」

「ああ、思いも掛けず友も出来たしな」

「あたしの事？」

「そうだ」

「そっか、うん、良かったね」

「良いばかりじゃないけどな、その相手はとんでもなく馬鹿で間抜けで無茶ばかりする」

「あんただってしょっちゅうあたしを振り回してるじゃない！人を道具扱いしてるくせに」

「元々はお前がやりたいって言ったんだろっが」

「それにしたって、なんか必要以上に目一杯叩かれてる気がする」

「それは気のせいじゃない、事実だな」

「気のせいじゃないんだ……そうなんだ、ふん、……このばかりねー！」

「だから蹴るなど、いや、殴れという意味じゃない」

「はーっ、……それにしても不思議な樹があるもんだね、やっぱり影の大地って不思議」

「そもそも精霊の元がその樹なんだ」

「ふえっ？」

「どんな声だ」

「ち、ちよつと驚いただけよ、それより、どういう事よ、それ」

「どういつ事も何も、そのままだ。あの母なる樹が精霊の源だ。あの樹が精霊を放出してるのさ。だから影の大地では濃厚で外に広がると共に薄まっているんだ」

「そうなんだ。それは、凄い事だね。こっちの人が知ったらびっくりするだろうな」

「ああ、そして良からぬ事をたくらむ愚か者も出てくるだろうな」

「ん？ああ、そうか、それで他人には話しちゃいけないのね」

「そういう事だな」

「でもさ、んつと、あんたにとってどつちかというと父様や兄様の方が大事な相手じゃない？なのになんであのお二人じゃなくてあたしなの？」

「お前が言ったんだ。友達なんだから本音で話そうって。だから俺はいつだってお前に俺の本当を告げている。何を聞かれてもごまかしたりはしない。お館様と次代様には恩義を感じているが、それは出来得る限りそれに報いたいという思いだ。だが、お前は違う。どんな貸し借りも無しに俺と対等に付き合いたいと望んだ。そして俺はそれに応えた。お前が俺にとって対等の相手である限り、俺はお前に対等を返す。友達とはそういうものだと思うからだ」

「……そっか、うん、友達は対等だもんね。本音には本音で返す。当たり前前の事か」

「なんだ、どうした？」

「う、うん、違うの。あたしったら、馬鹿だったなあと思ってさ。そんな簡単な事、二回も生きなきゃ分からなかったなんて。……自分が相手に本気で応じなきゃ、相手だって本気で応じてくれないんだ。そんな当たり前で大事な事、なんであの頃気付かなかったんだろっ」

「まあ馬鹿だからな」

「う、気軽に馬鹿馬鹿言うな！」

「自分で言ったんだろっ」

「他人に言われると腹が立つのよ！」

「身勝手なやつだ」

「あんたは本音を吐き過ぎよ、もうちょっと抑えなさいよ。友達相手にだって、最低限の礼儀というものがあるのよ」

「礼儀？……くっ」

「軽く笑うな！ボケ！」

「お前、他人相手に間違っってその言葉遣いやるんじゃないぞ」

「いや、いくらなんでもそれはナイ」

「この間客人に向かってしかめっ面をしていたのをお館様に見付かっっていただろう」

「あ、あれは言葉遣いとはなんの関係も……」

「城下の子供達相手に男のような口を利いていたな」

「っ！いったいどこで見てたの？撒いたと思っってたのに」

「お前なんか撒かれる訳がないだろ」

「くっ、このストーカー野郎！」

「なんだその、下品な言葉は、乙女なら恥ずかしくて口に出せないはずだぞ」

「へっ？えつと、ストーカーって言葉、こっちにあっただけ？」

「……ちよつと耳を貸せ、いいか？……で……だ」

「う……ぐっ」

時が過ぎ、人々の営みはやがて過ぎた歴史へと変わる。

伝説的な英雄としてではなく、愛すべき守護者として彼等は常に語られた。

癒しの乙女と天上の光の君。

母の語る夜辺の物語、子供達が歌う童歌の中で、彼等は生き生きと駆け回る。

そして、我等記録を記す者。識の技者は更に知るのだ。

彼等こそ、影と光の境界を設けた者達であつた事を。

そしてそれこそが、魔と呼ばれた者達との穏やかな共生の時代の幕開けとなつた事を。

最終夜・最も暗い夜こそが、夜明けを呼ぶのだと小鳥は歌う。 (後書き)

毎日更新という物に憧れて、なんとなく始めた物語でしたが、楽しんでいただけたでしょうか？

会話方式なのは、時間が無い中で毎日書くにはこれしかないと思っただけです。

この世界の人間達にも愛着があつたのに、作者の我がままのせいであんまりちゃんと書けなくて申し訳ない思いもあります。この物語はこれでおしまいです。

最後までお読みいただいた酔狂なあなた。本当にありがとうございました。

幕引き後の一幕・グランドフィナーレ（前書き）

番外編として、普通の小説形式で一話上げてみました。
楽しんでいただけたら幸いです。

幕引き後の一幕・グランドフィナーレ

普段は練兵のために開放されている広場に、新緑の防具に身を包んだ一団が整列している。

8兵8歩、64人が一隊となる皆の対魔騎士団が総勢6隊。いずれも歴戦の強者然とした顔つきだ。

「お前たち!!」

その集団を前にして、一際強面の男が声を張り上げた。

対魔騎士団全体を纏める総大将、朱の巖^{あけいわお}である。

「我ら騎士団は定例の巡回任務に出立する！定期巡回でありいわば慣れた通常任務だ、だが！我らがいかに通常に動こうと相手は我らに合わせてくれる訳ではない！油断即死！それを肝に叩き込み決して忘れるな！」

「ハッ！」

返答の声すらブレる事なく見事に重なり、まるで一声のように鳴り響いた。

ガッン！と、総大将の踵が地面を抉る。

「貴様ら！我らが守護の乙女よりお言葉を賜る！心して拝聴せよ！」

うおおおおお!!と、地鳴りのような歓声が上がった。

その歓喜は、総大将の一睨みで蓋をされたように瞬時に静まり返ったが、まるで圧縮された熱気のような物が騎士達の赤ら顔の中に詰め込まれているのがありありと見て取れる。

彼女は、普通の市井の女性なら気を失いかねないむさ苦しい一団の注目を浴び、彼らの前面に進み出た。

「我が騎士よ！私が望むのも告げるのも常に同じ、死する事を榮譽と思うな！民の為、我の為、生きて戦う事こそを榮譽とせよ！」

張りのある、しかし少女らしい細い声が、精一杯の響きで大気を震わせる。

健康的なしつかりとした体格と、淡く春舞の花の色の輝きを放つ外殻、それを彩る真珠色の精霊器官紋は複雑で繊細な物だが、実の所彼女は通常の方法で精霊の力を使う事は出来無い。

だが、それでもそれを一切恥じる事も隠す事もせずに騎士団の前でキリリとした笑みを湛える姿は、健気というよりも一つの希望ですらあった。

「我らが乙女に我が生命を捧ぐ！！魔を絶つ剣！民守る盾！我らが乙女に加護の元に！」

口々に唱和される言葉が、同じ意味を持って地と空を穿った。

人間よりも遥かに強大な力を誇る魔物に対する生きた防壁である辺境砦の騎士団は、天の加護を得んが為に常に守護の乙女を戴くが、これ程の熱狂は彼女がただのお飾りでは無い証でもある。

彼の乙女、常に前線にあり。

砦の末姫と生まれ、お披露目を過ぎて以来、守護の乙女は常に騎士団と在ったのだ。

「うつつ、いつもながらあの暑苦しさは耐え難いものがあるわ」

現守護の乙女、常名を花色と呼ばれる彼女は、その傍らの自らの守護者に愚痴を零した。

「仕事だ、我慢しろ。それにアイツらは気のいい連中だぞ、可愛らしいしな」

「彼らを可愛らしいと言つてのけるのはアンタぐらいよ」

役名を守護者、常名が無く、寄与された名を天の光と言う青年は、軽く彼女の言葉をいなす。

青年は黒闇に近い外殻に天の矢のような銀の精霊器官紋を持っていた。

彼はその紋の見事さに背く事ない実力を誇り、騎士団の漢達からは英雄のごとく讃えられている。

その出生の秘密を知る花色からすればそれも当然、彼は魔王の一族と人が勝手に呼び習わして来た影の大地の種族であり、外見こそ光源の地の人間と変わらないが、実の所何もかもが違う種なのだ。

影の大地の下位種族である魔物にすら人間数十人で掛からねば勝てないというのに最上位種である彼に普通の人間が敵うはずもない。

そして、彼に秘密があるように、花名にも秘密がある。

いや、秘密にしている訳ではないが、誰もまともに取り合つてくれない事実があるのだ。

彼女は今の彼女として生を受けるその前に、地球世界の日本とい

う国でごく一般的な少女として生きていた。

その記憶がそのまま残っているのだ。

時折彼女自身ですらその記憶を空想や夢の類ではないかと思ってしまう事があるが、前世というべきその生の中で強く蓄積した思いのせいで現世に影響を受けているのは確かな事実だ。

友人が欲しい。

悲しく強いその思いが、彼女を突き動かし、今のこの青年との友誼が成った。

同じように、立ち向かう勇気を望んだがゆえに騎士団の乙女として立つ事になったのである。

それが良い事だったのか、愚かな事だったのか、未だに判別の出来無い複雑な思いはあるものの、決して後悔はしていなかった。

「お前に比べれば断然可愛らしい」

……後悔はしていないつもりだった。

「アンタの感性は腐ってるのよ、こんなか弱い乙女に対してなんたる暴言！」

「プ……」

腹を抱えて笑いを堪えてる青年に、花色はためらう事なく蹴りを叩きこむ。

スパイク状の棘の付いた戦闘用ブーツが青年の外殻に当たってバチリと火花を散らした。

「何をする、か弱い乙女……うつ……は他人を蹴ったりしないぞ」
「自分で言っておいて笑うな！全く失礼なんだから」

外殻、自身のその堅い体の一部に手を当てて、花名はしみじみと思った。

過去の、地球での自分にはこのような物は無かったし、肉体の造りもどうも微妙に違う。

一番の違いは精霊器官だろう。

これは体表に現れる模様のような部分と、体内に血管と共に走る部分とを合わせた呼び名であるが、これがこの人間達の超能力じみた“技”を可能にしていた。

精霊の力というのは濃淡はあれど世界中の大気の中に存在するエネルギーの一種で、全ての生物はこれを体内に取り込みある種の発動エネルギーに変換する。

この能力は表に出ている模様が複雑で繊細な程強大だと言われているが、花名は模様は立派だが、肝心の精霊の力を取り込む能力に欠けていた。

これは時たま発生する障害であるのだが、よりにもよって皆の当主の娘という立場の彼女がそういう“能無し”であるというのは色々な心ない中傷を生んだものである。

もし、彼女に前世で除け者にされ、虐められていた記憶が無ければ、かなり捻くれた性格に育っていただろう。

嘆いているだけでは何一つ変わらない。

それが彼女が前世で学んだ教訓だった。

「またボーっとしてチキウとやらの事を考えているのか？」

“友人”である青年が、さして心配している風でもなくそう聞いた。

「色々考えていたのよ、なんで精霊の力が取り込めないのかな？とか」

「はっ」

青年は鼻で笑う。

「出来無い事を考えてどうする？一つの方法が駄目なら別の方法を試してみる。だからこそお前にだって“技”が使えるようになったんだろうが」

冷淡のようであるが、彼の言葉には嘘は無い。

実際に彼の提案で、現在花色は“技”を一応使えるのだ。

「乙女！守護者殿！」

「どうしました？」

「出ました！迷い魔物でしょう、甲羅熊ですな」

二人の乗る馬車に駆け寄った部隊長が報告を告げる。

巡回任務は全部隊で行うのではもちろん無い。

一部隊を二つに分け、勢子と狩子に分かれた二方位からの追い込みで、もし魔物が見つかればその魔物中心に場を作り狩るのである。

これを皆側を除く三方位、それぞれ一部隊ずつで行い、残りの三部隊は皆の守護として残る。

その巡回部隊の内の一つに彼女は同道する訳だが、この季節は乾きの時期と違ってそうそう魔物は現れないのだが、なんというか運が悪いのか良いのか、どうやら当たりを引いたらしかった。

「指示をお願いします。私たちは隊長殿に従います」

基本的に隊で動く時の指揮系統は部隊内の長が執る。

本来はただの験担ぎである乙女に実質の指揮権は無いし、彼女の専属の守護者である青年には元より何の権利も、そして義務もない。だが、彼らは当然のように騎士団と共に戦うし、その場合は部隊長の指示を受けて行動する事になっていた。

身分的な問題で、これは常に彼女から明言しなければいけないのが面倒な所ではあった。

「はっ！それではいつもの通り、お二方には出鼻の足止めをお願いいたします！」

「分かりました、それでは出ます！」

丁寧な言葉遣いは生真面目な隊長では致し方ない。

二人は素早く馬車を飛び出し、馬車の上の縁に手を掛けるとその箱型の屋根に飛び乗った。

ヒューウウ、と、馬車を曳く戦馬いくめが嘶きを上げ、その強靱な二本の前肢の棘を打ち合わせる。

地に付けたままの四肢を踏ん張り、すっかり戦闘態勢だ。

「いや、あんた等は戦わないんだからね？」

やけに張り切る馬達に軽く声を掛け、花色は馬車の屋根の上から方向を見定める。

勢子隊の掛け声と、花火に似た脅し技のバチバチという爆ぜる音、それらが右前方から近付いていた。

ピシッと、聞きなれた音にはっと身構える暇も無く、花色の体に

電気に似た衝撃が走る。

「ぐっ」

思わず息が詰まるような痛みに、わずかに涙が滲んだ。

「この馬鹿男！精霊の力を突っ込むなら事前に言え！」

「身構えると入り難くなるのは経験済みだ。我慢しろ」

心の中で無限の罵り言葉をぶつけていたが、今現在の現実にはそんな暇は無い。

ギチギチという堅い物が擦れるような独特の音と共に魔物が木々の間から姿を見せた。

「困めえええ！」

隊長の指示の元、騎士たちが散る。

地球で見た映画のガメラのような怪物だ。

その四肢や頭はカメラとは違い毛深い毛皮に覆われている。

「光弾陣！」

技名を叫ぶのは恥ずかしいが、やらなければ騎士団のタイミングがズレてしまう。

もはやそんな羞恥などには慣れてしまった花色は、声と共に多数の光の弾を打ち出した。

彼女が左右、青年が上下、それぞれにタイミングをずらしたエネルギー弾は、その魔物を翻弄するかのように飛び回り、少なくない

数がその身に到達した。

ギアアアア！ともグワアアア！とも聞こえるその甲羅熊の叫びが轟き、なんと堅い甲羅を中心にそいつは不規則に跳ね回り始める。

「不味い！」

最も騎士の多い背後へ、予測の出来無い動きでその魔物が突っ込もうとしていた。

「任せろ！」

天の光、そう呼ばれる守護者の青年がすつくと伸び上がると、その手から無数の針のような光が飛び出す。

「囲むぞ！網を広げろ！」

隊長の権限をすつ飛ばした指示が青年から放たれ、光の針が杭のように魔物の動きを封じた。

「おおおお！！！」

呼応した騎士達が四方から技を撚り合わせ、俗に網と呼ばれる停止枠を被せるように展開した。

瞬間、甲羅熊の動きが凍り付いたように止まる。

「今だ！」

今度こそ隊長の指示が飛び、魔光を帯びた武器が一斉に振るわれ

た。

「隊長殿、謝罪を」

なんとか魔物を狩り終わり、一息吐くと、守護者の青年が殊勝にも隊長に謝罪を申し入れた。

権限を超えた指示をした事だろう。

「いえ、とんでもない。おかげで一兵も損なう事なく事態が収束しました。元々は我が不明のいたす所。謝罪など必要ありません」

どうでもいいけど、と花色は考えた。

騎士達は、どうも彼女よりも青年の方をより敬っている気がするのだ。

突っ込んだら負けな気がして突っ込まないが、彼女としては何か悔しい。

「我が守護者の差しでがましい行いを許してくださった事、貴殿の深き懐を見る思いです」

従者の不明は主人の不明。

立場的な問題として、彼女は責任があるので、自分からも謝罪をした。

「乙女よ、貴女は頭を下げてはなりません！」

意外にも、返って来たのは叱咤だった。

「貴女は守護の乙女、福音の証です。騎士団に在る時の貴女は身分を超越した存在なのです」

うつ、と、花色は言葉に詰まり、よろめく。
ナニ？ソノ ヒトデナシナ アツカイハ？

「隊長殿……」

「乙女よ、祝福をお願いします」

こっそり溜息を吐いて相方の青年を見やると、思いつきりニヤニヤと笑ってみている。

（憎い！）

勝ち誇る美形面に落書きをしてやりたい思いに駆られたが、今は仕事が大事である。

「騎士団の戦功に祝福を！地に落ちし影が光にて払われし事を、世界よ、歌うが良い！」

勝利の祝詞を口にして騎士達の歓喜の声を聞きながら、心の中でがつくりと肩を落とす花色であった。

「別に嫉妬とかしてないんだからね」

「ふうん」

「何？」

「いや、なんでも」

「ナニ？」

怪しい視線に花色は青年に問い質した。

この青年が何か含みがありそうな言い方をした時は確実に何かがあるのだ。

場所は既に馬車の中、身分とか遠慮の無い友人同士の空間に戻っている。

「そんなに聞きたいなら言うが、お前、下衣垂スカートが捲れてるぞ」

ブツと乙女らしからぬ音を立てて噴き出し、彼女は慌てて自分の下半身を見た。

昔も今も秘めるべき場所である下半身を隠す前垂れが思いっきりめくれている。

「な、な、なんで、いつ？」

慌てて直しながら、疑問を口にする。

「馬車の上から降りた時……だと思っぞ」

「ひえええっ！それって騎士団に向かい合った時にはめくれてたって事？」

「皆礼儀正しいから、そういう物を直接指摘したりはしないからな」

そつえば、なぜかみんな赤くなって遠慮がちに花色を見ていた。彼女は戦闘の興奮からだろうと思っていたのだが、どうやら別の

興奮からだつたらしい。

「ぼけえ！一度死ね！いや、一度じゃ足りないわ！…とりあえず今ここで床に張り付いとけ！」

「いいじゃないか、臭い仲だし」

「変な事だけ覚えるなあああ！！！！」

影と光、二つの地を隔てる境を守護する辺境の砦。
そこには常に伝説が息づいている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3584x/>

最果ての地で～二人の幕間劇～

2011年11月14日14時28分発行